

## 技術顧問庭先訪問記

# 千葉県柏市 飯田利明さんを訪ねる

日本石灰窒素工業会 技術顧問 太田文雄

水稻の刈り取りが一段落した9月中旬、千葉県北部に位置する柏市布施で奥さんと農業を営む飯田利明さんを訪ねた。柏市街を通り抜け、車で走ること約20分もすると、畑や水田が目飛び込んでくる。もともとは純農村地帯で、大地は豊かな畑地と利根川に沿った広大な水田地帯がある。しかし、この地域にも都市化の波は徐々に押し寄せ、住宅が増加している。

この地域内には、関東三大弁天のひとつに数えられる布施弁天やあけぼの山農業公園があり、特に春から秋にかけては市民で大層賑わう一大レクリエーション地となっているなど、とても自然豊かなところである。

飯田さんは水田120 a、畑110 a、それに観光ブルーベリー園40 aを営んでいる。訪問した日は、水田の稲わらすき込み作業中であつたが、国産石灰窒素を使用している状況をお聞きした。

### 畑ではハウレンソウ栽培に石灰窒素を使用中

栽培している野菜は主にハウレンソウとネギで、JAに出荷している。奥さんと二人で従事しているが、なかでもハウレンソウは40 aを作付けし11月から3月まで出荷中だ。後作との兼ね合いで、どうしても3月で終わらせたいとのこと。

一方、ネギは5月から6月初めまで出荷し、その後は6月から8月いっぱい観光ブルーベリー園の対応、秋

は水稻の収穫と出荷に追われるという経営サイクルである。

飯田さんのハウレンソウ栽培における石灰窒素の使い方はこうだ。年内に出荷する分は9月下旬に石灰窒素を60kg/10 a 散布し、軽く耕うんして土と混ぜ、約2週間おいて10月中旬に播種する。なお、カルシウムと苦土分を補うために苦土石灰も100kg/10 a 施用し、基肥肥料として某有機質肥料を60kg/10 a 投入している。この後、10月下旬から随時11月中旬まで播種するが、この時期の栽培はトンネル被覆資材を活用している。

「ハウレンソウは葉が厚くて鮮やかな緑色をしていることが大切」と考えていることから、有機質主体の肥料使用に心がけている。なお、生育途中で追肥が必要な場合は液肥や酵素資材を用いて対応しているという。

早速、石灰窒素を使用しているうえで心がけていることをうかがってみた。飯田さんは、常に散布後播種まで2週間は期間をあけているという。播種までの間に石灰窒素の農薬成分で雑草を防除し、その他の病原菌を減らすようと、農薬成分のシアナミド効果をねらったの使い方である。そして、苦土石灰は播種の1週間前、有機質肥料は播種3日前までに散布している。

本格的に石灰窒素を使い始めたのは4年ぐらい前から話す。使い続けることで雑草対策（雑草の発生が少なくなった）やセンチュウ防除の効果を実感していると語る。さらに「石灰窒素は肥効期間も長いことから野菜の良品生産などにもつながる肥料である」と強調してくれた。

また、この地域は「坊主知らずネギ」の産地でもあり、それなりに作付面積は多いが、飯田さんも5年ぐらい前から黒腐菌核病の発生に悩まされているという。まずは畑の土壌を改良するために令和2年度に緑肥作物のソルゴーをすき込んだ。馬ふん堆肥と石灰窒素を上手く活用しながら、何とかこの病気を抑え込めないものかと思案中である。



飯田利明さん

## 稲わらすき込みに石灰窒素を施用中

飯田さんのお米は直接消費者の元へ届けられている。このため、消費者との信頼関係を損なうことのないよう、食味のよさには人一倍こだわりを持っている。周辺では昨今、コメの取引価格が低迷し生産農家のやる気を削いでいると話す。そこで、生産コストを少しでも安くし経費を削減する方向に走っていることが、こうした状況下での地力低下や品質低下など、さまざまな諸問題を引き起こしていると顔を曇らせた。

飯田さんはひと手間加えた稲わらすき込みを実践中だ。姿勢として「水田の地力向上と食味を大事にしたい」とする強い思いが背景となっている。早速、稲わらすき込みの方法などをうかがった。作付品種は「コシヒカリ」で、当日は30 aの面積分を作業中であつた。

水稻収穫後、20日以内に石灰窒素20kg/10 aを背負い式肥料散布機を使って散布し、ロータリーの深さを浅くしながら回転数を少し上げたままの状態ですき込んでいく。刈り取り後の稲株をできるだけ細断したいと考え、回転数は落とさないのだ。飯田さんは、この稲株の腐熟こそがポイントと捉えており、そのためには最初の細断が大切と考えている。そして、年内には必ず2～3回耕うんしながら腐熟を促すようにすることと、年明けにも2回程度は耕うんし、春の作付けまでに計5回は耕うんを行うという。こうしてひと手間を加えることによって、稲わらの腐熟は完全に進み、通常問題となっている“わきの発生”は全く見当たらなく、さらには雑草の発生も確実に減少してくることを実感している。

春の基肥には、某有機肥料50kg/10 aを使いながら窒素成分で7kg/10 a程度を投入している。この場合、通常は稲わら腐熟に石灰窒素を使用した関係で1kg/10 a程度窒素成分を減肥するが、飯田さんの基肥の窒素分量は、この辺も含めてこの量なら大丈夫のようだ。なお、生育途中での追肥などは、稲の生育状況をみながら「味好特号（6－8－4）」を使用するという。

## 飯田さんの石灰窒素の使い方ポイントは

露地ホウレンソウの秋まき栽培であるが、いずれも播種2週間前までには石灰窒素を散布し、軽く土と混ぜる作業を行っている。こうすることにより、ホウレンソウの播種までには農業成分のシアナミドが肥料成分へと分

解し、発芽障害は起こらない。逆に、この期間でシアナミドが雑草を防除し、量は少ないが土壌センチュウや根こぶ病などの病原菌への作用にも期待しての上手い使い方であるといえる。また、肥効調節肥料としての特性を上手に活用した施肥体系ともいえるのではなかろうか。

一方、水田の稲わらすき込みに関しては、やや硬くて塊のある稲株をいかに速やかに腐熟させるかを考え、最初のすき込み時にロータリー回転数を少し高めに設定しながら浅く耕うんすることで上手く細断を調整している。

また、5回ほど耕うんするということから、腐熟化をいかに丁寧に行っているかがうかがえる。これだけの作業を行えば、稲わらは完全に腐熟し田植え時に問題となる“わきの発生”は全く生じないものと考えられる。



稲わらすき込み作業中



すき込み後



背負い式肥料散布機を使って石灰窒素を散布

## 今回の訪問を通じて

飯田さんとの話からは、よくいわれる“農産物の味よし・物よしの精神”に全くぶれのない取り組みを実践していたことが印象深い。一般的には儲からない農業の機運が漂うなかで、消費者との距離感も近いという環境があるにせよ、このつながりを大切にしたい農業経営者であることに違いはない。飯田さんのことはあえてひと手間をかけている農業生産者といわせていただくが、しっかりと信念や信条を持ったひと際光るものを感じることができるのは筆者だけではあるまい。飯田さんのように有機にこだわり、地力にこだわり続ける農業の一端に、石灰窒素は少しでも役立っているのかと思える訪問日でもあった。